富山県俳句連盟会報

第 89 号
令和元年十二月一日発行
富山市安住町二―一四
〒930-0094 電話 〇七六-四五五-三四三
振替番号 金沢 五―一七一〇八
北日本新聞社編集局内
富山県俳句連盟

第六十八回 富山県芸術祭主催
第二十三回 富山県民芸術文化祭参加
秋季俳句大会
大割範孝先生の講演を聴く

富山県芸術祭主催並びに富山県民芸術文化祭参加の秋季俳句大会は風爽やかな十月五日（土）午後一時から、北日本新聞ホールにて、百四十余名の参加を得、坂田直彦幹事の司会により開催。中坪達哉会長は合同句集発刊の継続と意義そして多数の参加を望むと挨拶。

続いて、北日本新聞社編集局次長、文化部長の大割範孝先生を講師に迎え、「旅から作品が生まれる時―宮本輝とシルクロードー」という演題で、六千七百キロに亘る旅の映像をもとに、宮本輝氏の作家魂を聞く。（講演要旨は別掲）

小憩後、俳句大会に入る。すでに出句されている五九六句（二九八名）について、連盟役員に選考された特選句、入賞句を久崎富美子、四宮一子両幹事より発表。

そのあと杉本恵子理事、岡田康裕理事、川上弥生幹事、新保吉章理事が講評。

引き続き表彰式に移り、大割範孝北日本新聞社文化部長より北日本新聞社賞、中坪達哉会長より連盟賞をそれぞれに贈呈された。（成績は別掲）

浅野義信副会長が閉会の辞を述べ大会は盛会裡に終了。

尚、当日、連盟合同句集（第四十四集）を発刊し、配布した。

又、北日本新聞社主催の「越の賛歌」作品（投句数二九五句）の入賞百句は北日本新聞十一月九日付け朝刊に掲載され、発表となった。

挨拶の中坪会長

連盟夏季吟行会
富山県民共生センター・サンフォルテ

七月十四日（日）夏季吟行会を開催。富山県民共生センター・サンフォルテ（富山市湊入船町六―七）を会場に炎暑の中、環水公園・富岩運河、中島閘門等を吟行。

講師に「辛夷」主宰・県俳連会長の中坪達哉先生を迎え「棟方志功と俳句」の演題で講演を聞く。

参加役員が選を行い、上位入賞者は次の通りである。参加者六十一名

天　位
青葦や運河に野鳥図鑑古り　浅野　義信

地　位
閘門のまた張り直す蜘蛛の糸　中島　廣志

人　位
白日傘古希の歩幅となりにけり　石灰　潤子

富山県現代俳句協会
秋季吟行俳句大会

九月一日（日）富山市民プラザで開催。参加者三十七名で二句投句。

天　位
石垣の上はのつぺら秋の風　高木　昭夫

地　位
緑陰は風来るところ普羅の句碑　坂田　直彦

人　位
新涼の城内立札「カラスに告ぐ」　坂田　紀枝

十一月九日（土）同協会の第十三回ジュニア俳句大会を開催。県教育文化会館にて優秀作品を表彰。応募校四三校、投句数一、六八五。

富山県知事賞
逆上がり足の間に虹がある　朝日町立さみさと小六年　水島大哉

富山県教育委員会賞
オリオンざ指さす父と魚信待つ　高岡市立伏木小五年　浦田公喜

他、北日本新聞社賞、協会賞など多数の児童作品を表彰する。

二〇二〇年度
総会・俳句大会（予告）

とき　二〇二〇年六月六日（土）
ところ　北日本新聞ホール
講　師　「いには」主宰　村上　喜代子　先生
（詳細は追って発表）

秋季俳句大会作品抄

◇連盟選者特選句

義信選　魂棚を仕舞ふ安堵と寂しさと　谷　雅夫
順子選　青田波棚田千枚駆け上がる　今井　淳良
かづを選　百合匂ふインターフォンを押してより　平木　丈子
冬青選　風と来て風と踊りぬ風の盆　八尾とおる
英子選　手を引いてくれる子がいて夏まつり　川上　淑子
玲子選　団扇には芭蕉の一句風やさし　沖村　幸子
可津志選　下駄鳴らし来る子もゐたり地蔵盆　牧田　孝子
置箔選　隣席の扇子の香りいたゞけり　田中　律子
こうき選　断層の走る真上を秋耕す　八尾とおる
康裕選　地蔵盆新幹線の見える路地　松谷眞佐子
久惠選　ひぐらしや明日も働らく足洗ふ　四十物敦子
城子選　辛抱の棒を継ぎ足す熱帯夜　久保　俊一
ゆう子選　三猿になりて横たふ暑さかな　清田　圭二
弥生選　ふるさとは屋号で呼ばる墓参り　新田　義博
富美子選　ひとまづは土間に転がす大西瓜　杉本　恵子
美智子選　ひぐらしや明日も働らく足洗ふ　四十物敦子
洋子選　ままごとのやうなる間取り長崎忌　石川　彰子
直彦選　肩車されて祭の子となれり　四宮　一子
一子選　ただいまと聞ける幸せ豆御飯　日合　英子
重之選　百日紅なんて明るい朝だろう　吉見　啓子
吉章選　ラムネ飲み干し青空も少し飲む　浅尾　京子
桂子選　地下道の谺八月十五日　五箇　洋子
恵子選　帰省子のはなしなかばに夫眠り　川辺智惠子
昭夫選　ひとまづは土間に転がす大西瓜　杉本　恵子
眞知子選　はや足の小犬と少女朝ぐもり　石田　英子
寿山選　夜もすがら大地の歌や蛙の田　船平　晩秋
三久選　参道を来て炎昼の不信心　石灰　潤子
廣志選　百円の石の籤買ふ地蔵盆　明官　雅子
達哉選　帰省子のはなしなかばに夫眠り　川辺智惠子
三津夫選　ビール注ぎ合ひて闘志を称へ合ふ　荒木かづを
睦子選　ランドセル駆けくる音や青田波　黒瀬　行雲
美知子選　青田波棚田千枚駆け上がる　今井　淳良
多佳子選　地下道の谺八月十五日　五箇　洋子
栄子選　風と来て風と踊りぬ風の盆　八尾とおる
幸子選　片道と知り征きし人銀河濃し　小野田洋子
賢一選　盆用意ぴんぴんころりとは逝けず　土田　由朗
千鶴子選　茹で蛸の頭抱えて売られけり　藤井　詩耕
純子選　虫干し会木馬に架かる子の法衣　中村瑠璃子
稔選　包帯を真水で洗ふ終戦日　石田阿畏子
とおる選　荒梅雨や屋根に石おく浦の家　堀　智恵子

◇入賞句

天位⑧　肩車されて祭の子となれり　四宮　一子
地位⑧　積ん読の上が定位置古団扇　水野　元雄
人位⑧　水中花忙しきことに身が馴れて　室井千鶴子
4位⑧　川風に一息つきて草刈女　生田　伸子
5位⑦　レース編む夫居る夜も待つ夜も　野村　邦翠
〃⑦　あの日まで履いてゐたくつ魂迎　久﨑富美子
〃⑦　地蔵盆新幹線の見える路地　松谷眞佐子
〃⑦　地下道の谺八月十五日　五箇　洋子
6位⑥　路地裏にのこる昭和や水を打つ　青木　章子
〃⑥　日焼してクラスどの子もよく笑ふ　脇坂琉美子
〃⑥　曝す書の苦学の父の赤傍線　二俣れい子
〃⑥　虫干し会木馬に架かる子の法衣　中村瑠璃子
7位⑤　空襲の手記満載の書を曝す　森野　稔
〃⑤　里山の秘密の場所やかぶと虫　成瀬　輝代
〃⑤　手を引いてくれる子がいて夏まつり　川上　淑子
〃⑤　帰省子に常より厚き玉子焼　太田　克夫
〃⑤　百円の石の籤買ふ地蔵盆　明官　雅子
〃⑤　けふの事けふで終らせ星涼し　板谷野々江
〃⑤　西日射す廊下まるごと万華鏡　藤井　詩耕
7位⑤　茹で蛸の頭抱えて売られけり　藤井　詩耕
〃⑤　コスモスを咲かせ仮設の長住まひ　久﨑富美子
〃⑤　退院の道端に買ふ大西瓜　金山美恵子
〃⑤　大夕焼沈み切るまで光る波　谷　順子
〃⑤　帰省子の電池替えやら補修やら　早川　範子
8位④　風と来て風と踊りぬ風の盆　八尾とおる
〃④　百日紅なんて明るい朝だろう　吉見　啓子
〃④　下駄鳴らし来る子もゐたり地蔵盆　牧田　孝子

句集ほか出版紹介

佐々木妙子「夏木立」　令元・5
黒瀬行雲ほか「俳句の杜」　令元・7
ＶＩＴＡクラブ俳句教室会員句集　令元・10

句碑建立

宇奈月公園　八尾とおる　令元・6・27
音とほく雪解のあとの滝太る
戦争に勝利など無し昭和の日

「越の讃歌」（山）高点上位入賞作品

初登頂ぼくから俺に変わる夏　上田　森子
山頂を極めてさらに天高し　四十物敦子
語り継ぐ山家の暮らし渋団扇　内橋はるみ
五箇山の水こだまして新豆腐　吉崎　陽子
颱風の盾に幾度立山剣岳　窪田富美子
同行に遅れて独り登山杖　木澤つとむ

二〇二〇年度　夏季吟行会（予定）

とき　七月十二日（日）
ところ　射水市新湊中央文化会館

講演要旨

旅から作品が生まれるとき

―宮本輝とシルクロード―

北日本新聞編集局次長
文化部長　大割範孝

作家・宮本輝さんとシルクロード六七〇〇キロの旅をしたのは、今から二十四年前。中国の西安からパキスタンのイスラマバードまで車で三十八日間をかけて車で踏破した。

その後、宮本さんは北日本新聞に「ひとたびはポプラに臥す」という長編紀行を四年間にわたり、計二〇三回連載した。この連載は講談社から全六巻で刊行されている。

宮本さんはそれ以後も数多くの小説を生み出しており、たびたびシルクロードの素材が登場してくる。

一覧すれば以下の通りである。これらを〈宮本輝のシルクロード六作品〉と名付けたい。

『ひとたびはポプラに臥す』一九九五・一〇・一〇～一九九九・一一・九　北日本新聞連載　二〇三回

「道に舞う」（短編）一九九六年一月号「文學界」

『胸の香り』所収　一九九六年発刊

『草原の椅子』一九九七・一二・三～一九九八・一二・三一　毎日新聞連載　一九九九・五月発刊

『星宿海への道』一九九八・二月号～二〇〇二・四月号

「星星峡」連載　二〇〇三・一月発刊

「スワートの男」（短編）『宮本輝の本―記憶の森』（宝島社）所収　二〇〇五・四・一五発刊

『三千枚の金貨』二〇〇六・四月号～二〇〇九・八月号

「BRIO」（光文社）連載　二〇一〇・七・二五発刊

シルクロードを旅したのは一九九五年五月二五日～七月一日である。その後二〇〇九年に『三千枚の金貨』を脱稿するまで、宮本さんは十四年間にもわたり、さまざまな作品の中でシルクロードで出会った光景や人物を振り返りながら、旅を続けてきたとも言える。

宮本さんはよく、「寝かせる」ことが大切だと言う。旅に出掛けたからといって、人はすぐに何かを学んだり、賢くなったり、詩人になったりするのではない。長い年月を経ても消えずに残るもの、あるいは人生の危機に直面してふとよみがえる光景や言葉などをあらためてかみしめて心の滋養になっていく、という意味だと理解している。

そのような意味で、先に挙げた〈シルクロード六作品〉に年代順に触れるとき、宮本さんがシルクロードの旅からどのように思索を深めていっているのかも垣間見ることができるといえよう。

インターネットのグーグルマップで中国の内陸部を拡大して見てもらうと分かるが、シルクロードは乾いた茶色い大地を走っている。西安を出ればすぐに、はげ山ばかりが目に入る。わずかな水を天秤棒で担いで山道を上り下りして、農民たちが畑を耕している。日本では聞き慣れない「蒸発量」という指標があり、降雨量より蒸発量が多いのだと聞いた。

目にするのは、そのような過酷な自然で生きる人々の姿である。日々の暮らしのためにも体を酷使するため、ぜい肉を付けたような人はいない。顔のしわは深く刻まれ、埃にまみれ、辛抱強さと諦観のようなものを漂わせている。

灼熱の太陽に照りつけられた荒涼とした大地には、蜃気楼と竜巻が代わる代わる現れる。二〇〇～三〇〇キロおきにオアシスにたどり着くが、そこでは人口的に圧倒的に多いウイグル族が少数の漢民族の支配下に置かれていることが分かる。

オアシスは私たちが潤いと食事にありつける場所であるのは違いないが、漢民族の役人に賄賂を要求されることも多く、腐敗と虐げられた人々を目の当たりにする場所でもあった。

宮本さんは『ひとたびはポプラに臥す』で素直な感想をつづっている。

「中国の道はあきらめろ、あきらめろとささやきつづけてるな」

「砂漠より人間のいるところの方が不毛だ」

「虚しさを見、荒涼と寂寥を見、そこでしたたかに生き、恋をし、夫や妻や子を愛し、幸福を求め、働き、ゴビ灘の灼熱の土中に埋葬されていく人々を見ることは、俺の望むところではなかったのか…」

宮本さんは旅から四年後に発刊した『草原の椅子』のあとがきに次のように書いた。

「長い旅のあいだ、しょっちゅう考えたのは、「おとな」とはどのような人間のことを指すのかという問題だった。文明と民族の十字路をさまよっているうちに、私は『日本』に『おとな』がいなくなったことを痛切に感じたのだ。しからば、『おとな』とは何であろう。

幾多の経験を積み、人を許すことができ、言ってはならないことは決して口にせず、人間のふるまいを知悉していて、品性とユーモアと忍耐を持つ偉大な楽天家でもある」

そして、登場人物に物語のクライマックスでこう言わせている。

「清潔に生きたいな。悪いことをしないで、人をやっかまず」

と憲太郎は言った。

それと同じことをフンザでも考えたのだった。

「いつ死んでもいいように、清潔に生きたいな」

さらに『三千枚の金貨』でこのようなくだりがある。埋められているはずの金貨を探していた登場人物たちが、今掘り出さず、二十年寝かせようと相談するのだ。そしてこう言う。

「二十年待てたら、俺たちは大きな人間になれるなァ」

「大きな人間て、どんな人間？」

「悲嘆もしない、落胆もしない、という人間だよ」

この「悲嘆もしない、落胆もしない人間」という箇所を読んだとき、私の脳裏にはシルクロードですれ違った数々の市井の人々の顔が浮かんだ。シルクロードが宮本さんの思索の歯車を一つ回したのだと思った。

（＊講演では宮本さんが見た光景を五〇〇枚を超える写真とともにたどり、一時間半にわたって紹介しましたが、紙幅に限りがあるため一部のみを抜粋して紹介しました）

俳人協会富山県支部　俳句大会

九月二十三日（日）富山電気ビルにて開催。俳人協会評議員「りいの」主宰檜山哲彦氏を講師に迎え講演を聞く。演題は「俳句のありよう」会員八七名で三句投句。

講師特選

車座を解けばはじまる虫しぐれ　河野　尚子

てのひらのよくはたらく日鳥渡る　脇坂琉美子

どの樹にも来てゐる秋の暑さかな　荒田眞智子

落蟬の終の震へを掌　浅尾　京子

焦げ臭き鳥の目となる炎暑かな　大塚　喜子

☆互選高点句

一　位

爽やかや遊び足りたる子の匂ひ　森　純子

二　位

暫くは迷子でいたき花野かな　浅尾　京子

三　位

つぶやきはいつも字余り秋暑し　平井　弘美

俳人協会主催、第八回全国俳句大会ジュニアの部、小学校部門

学校賞　高岡市立伏木小学校

消　息

俳人協会第58回全国俳句大会賞

大会賞

一軒のための山道山桜　野村美智子

秀逸賞

声届くところに夫や春田打つ　杉本　恵子

みんなゐてみんな若くて春の夢　野村美智子

八尾町民俳句大会

九月二十八日（日）八尾ふらっと館にて開催。参加者十三名。

八尾文化協会　村上志水特選

木犀の香にさそわれし万歩計　笹木　雪子

コスモスを手にコスモスの風の中　平野　孝純

熊除けの笛吹き登る野菊道　水上そのえ

むきむきに風の頷くねこじゃらし　若松　章子

抱き合うて栗の三つ子は毬の中　井上久次郎

北信越ホトトギス俳句大会

九月二十九日（日）ホテルニューオータニ長岡にて俳句大会を開催。当日吟行は良寛記念館、朱鷺と自然の学習館。参加百十余名。

稲畑汀子選

爽やかに年をとらうと合言葉　荒木かづを

露の世の越後の竜と呼ばれしと　髙城　玲子

句梵鐘仰ぎしみじみ旅の秋　田上眞知子

待望の佐渡はいづこに霧の海　岩城　未知

第46回　砺波市文化祭俳句大会

十月十二日（土）砺波市文化会館にて開催。投句二三二句。投句者七四名。

中坪達哉県俳連会長　選

天　位

障子貼り替へて読経の滑らかに　島倉　千春

地　位

夕暮れに立ちて我が家の刈田風　今井　秀昭

芋茎剥く母の往診待ちながら　堺井　洋子

人　位

虫の夜の本音ぼかして書く日記　田村ひろみ

花野来て寛解願ふ日の遠く　島田　一子

用の無き友の電話や秋の暮　宮田　衛

辛夷年次俳句大会

十月十三日（日）富山電気ビルにて開催。参加者八十名

令和元年度　辛夷賞　脇坂琉美子

衆山皆響賞　石黒　順子

奨励賞　浅尾　京子

磯野くに子

大会句

地　位　平木美枝子　太田　硯星

人　位　澤田　宏　水上　玲子

中島　廣志

第38回　芭蕉まつり俳句大会

十月二十六日（土）小矢部市石動公民館にて開催。投句一般五〇句。小中学生五〇七句。

講師　白井重之県俳連理事

演題　「わたしの現代俳句」

天　位

一瞬のためらいありて切る牡丹　寺山　正子

編集後記

連盟会報89号をここにお届け致します。次回は二〇二〇年七月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば、**原稿用紙**に記入の上、左記に送付下さい。

（郵送又はFAXのみ）

〒九三九―一八一一　南砺市理休二二六
川井城子
FAX・TEL（〇七三）六二―一三〇八